



昨年5月8日に新型コロナウイルスが感染症法上で5類に移行してから1年余り。修学旅行生や外国人参拝者らでにぎわいの戻った清水寺（6月1日）

清水 第二三一号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・狩野山雪筆「板絵金地着色繫馬図」	
令和六年に読む法然上人	清水寺貫主 森 清範 …… 2
大西良慶和上法話「般若心経講話」③	…… 12
清水寺 長臈語り ②	清水寺長臈 森 孝忍 …… 21
能登半島で炊き出し	清水寺執事 大西晶允 …… 30
『四十手深要決義』を読む 第28回	清水寺執事 森 清頭 …… 35
阿弥陀堂と法然上人の長く深い縁	清水寺学芸顧問 坂井輝久 …… 44
狩野山雪の絵馬「繫馬図」重文へ	清水寺学芸員 内田 孝 …… 61
五明洞浄墨 人見少華筆「台湾行悦和歌懐紙」	…… 70
「清水寺・古写真館」参道の敷石	…… 71
『成就院日記』翻刻・刊行にあたって④	清水寺史編纂委員 田中香織 …… 72
清水寺門前会、第三代会長に梅月一永氏	…… 86
『清水寺成就院日記』第8巻刊行	…… 87
雨の中、今年の「水の日」法要	…… 88
大黒天慶讃法要と経堂での作品展	…… 89
大相撲・音羽山親方が本堂参拝	…… 91
現代芸術の作品が境内、成就院に	…… 93
英国駐日大使夫妻が森貫主と懇談	…… 94
京博の保存環境調査が2年目に	…… 97
内外往来	…… 99

令和六年に読む法然上人

清水寺貫主

森

清
苑

元日早々に起きた能登半島地震で、曹洞宗・總持寺祖院（石川県輪島市）が大きな被害を受けました。春の彼岸の段階では、まだまだ多くの方が避難所での生活を余儀なくされています。能登の曹洞宗では、福井県・永平寺ではなく、横浜市鶴見区の総本山・總持寺の末寺がたくさんあります。曹洞宗は道元禪師（一一〇〇～一二五三年）を高祖とし、道元禪師四世の法孫に当たる瑩山紹瑾禪師（一二六八～一三三五年）が總持寺を開きました。總持寺祖院は二〇〇七年の能登半島地震で被災し、二〇二一年に修復・耐震工事を終えたばかりでした。また、今年は瑩山禪師の大遠忌七百年でもあります。能登半島では、曹洞宗だけでも四十カ寺が全壊、半壊の被害を受けたと聞きました。復興はほんとうにたいへんです。心よりお見舞い申し上げます。



法話をする森清範貫主

伝統のある輪島塗りにも被害が出ました。事業を元に戻すには時間がかかります。地元の人たちと相談して、「何かお手伝いできることがあれば」と知恵を絞っているとあります。東日本大震災では「絆」という漢字がクローズアップされました。今回、輪島の

「輪」がサークル、支援の円環などを連想させる漢字ですが、みなさんは、どうお考えでしょうか。

二月から三月前半は暖かい日々が続き、仁王門下の老梅の紅梅は、春分の日にはや満開を過ぎました。一転、三月下旬は平年の気温に届かない日が続き、桜の開花は前年よりも遅れました。毎年この時期、花粉症で悩む方が多いですね。幸い私は大丈夫ですが、同年代の知人や野生のニホンザルでも花粉症に悩むことがあるようです。「鼻水がつらい春」を意味する漢字を作り、「苦澹」。「くシユンクシユン」となりにけり」という川柳があるそうです。「春」は「spring」スプリング」、バネですね。この時期は土の中から熱気がわいてきます。今年は三月四日に啓蟄けいちち。三月中旬は例年なら、日に日に暖かくなっていく時期です。

天智天皇（六二六〜二六七二年）の皇子、志貴皇子（？〜七二五、七二六年）が春を扱った次の歌が『万葉集』に収められています。

石いはばしる垂水たるみの上のさ蕨わらびの萌もえ出づる春になり
にけるかも



彼岸会の法話会で語る森清範貫主（3月20日、京都市東山区・専称寺）

岩の上を激しく流れ落ちる滝のほとりでワラビが萌え出ている。「ああ春になったんやなあ」。春が訪れる喜びを詠んだ歌ですね。

冬が終わって暖かくなると、毎日のように大勢の外国人のみなさんが参拝に訪れてくださいます。

三月中旬、京都で開催される「がん」をテーマにした国際学会を前に、京都大学の案内で欧米からのお医者さんたちが来山されました。おひとりから「清水寺は、いつ頃からこんなになくさんの外国人が参拝にこられているのでしょうか」との問いかけがあり、「清水寺は、七七八年の創建時から、京都に来られた方が宗旨宗派を問わず、お詣りされる寺であり続けているのですよ」と返答いたしました。

十六世紀中頃の制作で、境内の伽藍と参拝者らを描いた絵図「清水寺参詣曼荼羅」があります。寺の周辺も登場します。鴨川から五条大橋（現在の松原橋）を渡り、六波羅蜜寺などを経て、清水寺本堂に至る道筋をたどっていくと男性、女性、刀を差した人、傘を手にした人などさまざまな方が参拝にいられているのがわかります。音羽の滝から水を持ち帰ろう

とする人まで、さまざまな情景が確認できます。

千年前の平安時代には紫式部、清少納言（ともに生没年不詳）が来山されました。ことに清少納言は、十回以上も来られたようです。『枕草子』の一節「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」は、春の日に夜が明ける前、うっすら見える時間帯を描写しています。京都御所から東を眺めているのですから、「ああ千年前に清水山を見たはったんやな」と喜んだのですが、知恩院の和尚さんは「いや、華頂山や」と。華頂山と清水山は、同じ東山でつながっているのですから、どちらであったとしてもよいのです。

それにしても清少納言は、あちこちの寺で説教を聞いているのですね。三十三段には「説法は男前から聞くのがいい。じっと見とれて聞いていると理解できるが、男前ではない和尚だと、ついよそ見して聞いたことも忘れてしまう。バチが当たるから、これ以上は書かないけれど」と記しています。私も、昼前の法話を頼まれると困ります。聞いている方が

空腹になって時計を見るなど、「昼ご飯やし、もう止めとけ」とお考えになっている様子がありありとわかるのです。

清水寺と法然上人

二〇二四年は瑩山禅師の大遠忌だけでなく、法然上人・浄土宗開宗八五〇年でもあります。開宗八五〇年を迎えた浄土宗の宗祖・法然上人（一二三三〜一二二二）は、清水寺とのご縁が深いのです。十四世紀前半に成立し、上人の誕生から布教の姿などを伝える国宝『法然上人行状絵図』四十八巻には、約八百年前に上人が清水寺にお越しになられた様子が描かれています。とても保存状態がよく色鮮やかで、「清水の舞台」を描いた最も古い絵図と思われる。「舞台」を支える柱は四角く描かれており、現在の丸い柱と異なるのも特徴ですね。

絵図には詞書きが添えられています。それによると、法然上人は一一八八年（文治四）五月十五日、清水寺で一般の人たちに「戒」の条目を読み上げ、それぞれの罪を懺悔させる「説戒」を行いました。音



清水寺・阿弥陀堂で、森清範貫主を導師に執り行われた春の彼岸入り法要。左端に法然上人像のお前立像が見える（3月17日）

羽の滝の上手に位置して「瀧山寺」とも呼ばれた阿弥陀堂を道場とし、大勧進・印蔵の求めに応じ、清水寺の僧・能信が開白発願して阿弥陀仏像の周りを歩き回りながら、昼夜、阿弥陀仏を念ずる「不断常行念仏」を始めたところ、僧侶だけではなく、たくさん一般の人たちが参詣し、法然上人に帰依することになったのです。この頃はまだ、上人の「称名念仏」が浸透していませんでした。

「称名念仏」とは学問をすることではなく、ひたすら念仏を唱えることです。この時代、比叡山が貴族など特権階級のための宗教拠点であったのに対し、法然上人は「仏教は大勢の人たちに伝え、人々を救うもの」と考えて山を下りたのです。当時の念仏には、仏さまを心に思い描いて唱える「観想念仏」がありました。が、法然上人は弟子たちに授けた「一枚起請文」のなかで、「念仏は、学問をして覚ったような気持ちになって唱えるものではない。ただ一途に唱えるものだ」と、ぴしゃっと念仏についておっしゃっています。中国で浄土教を大成した善導大師さま（六一三〜六八一年）は、『観経疏』散善義の一文

で「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近くんにんを問はず、念念に捨てざる者、これを正定の業ごうと名づく、かの仏の願に順ずるが故に」と説いておられます。「朝起きて念仏、昼も念仏、寝る前に念仏など、念仏を百万遍唱える。すべてが念仏だ」と。念仏三昧が大切である、とおっしゃったのです。

清水寺の中興開山・大西良慶和上（一八七五〜一九八三年）は、数えて一〇九歳までお元気でした。弟子として身近に接していると、和上は毎朝、目を覚ますと布団の中で手を合わせておられましたね。「南無阿弥陀仏、よう目を覚まさせていただいた、南無阿弥陀仏」と唱えられていたのです。念仏とは「仏を想うこと」です。行住坐臥、人間の一日の行いはすべて念仏である、と。和上は、そのように捉えられていました。

ところで、近江商人の多くは念仏の信者さんなのです。仕事をするのがお念仏、天秤棒てんびょうぼうを担いで朝一番に出て行くことがお念仏。畑を耕すこと、食事をする、風呂に入ること、食事、すべてがお念仏。これが常行念仏なのです。私が念仏であり、ひ



大西良慶和上が百九歳で揮毫した「風光千里」。清水寺・円通殿に飾られている

とつひとつの仕事も念仏になるのです。「お念仏を唱えることは大切である」と、良慶和上は説かれていました。

和上は、揮毫を頼まれることも多かったです。一九八三年（昭和五八）二月十五日に一〇九歳でお亡くなりになったのですが、その年の正月にも書き初めをされました。一〇九歳なので「百久」と署名した「風光千里」の額装は、円通殿に飾ってあります。この書もまた、お念仏なのです。和上は墨も紙も大切にされました。「昔は紙がなかったから」とお盆の上に砂を敷き、指で字の手習いを繰り返し、指で字の手習いを繰り返したそうです。物のない時代をご存じだけに、「今は新聞

紙も包装紙もあるのに、みな手習いをせん」と、私たちに苦言を呈されていたお姿を懐かしく思い出します。

書で申しますと、モンゴル出身の横綱・鶴竜関が引退して伝統のある部屋を復興することになり、先日、看板の揮毫依頼がありました。部屋の名前は「音羽山（おとわやま）部屋」で、看板は幅五〇センチ、長さ一六〇センチ。清水寺の山号が「音羽山（おとわやま）」とのご縁でご相談があったのです。揮毫の際、和上は、日本の紅花墨七分と中国の硬い墨三分を擦り合わせました。水は境内にある音羽の滝で用意し、まず私が一時間ぐらい擦るのですが、「お前の擦り方は鱧節かつおぶしを擦るようだ。粒子が粗い」と指摘され、その後にご自分でも一時間は擦っておられましたね。「力を入れて潰すような擦り方はあかん」ともっとゆっくり擦るよう指導されるのですが、どうしても私たちは「早く終わらせたい」と思ってしまうのです。結局、揮毫のために墨擦りだけで三時間はかけていました。和上は擦り終わっても、墨を一時間は寝かせておられました。なぜかと尋ねると、「ご飯で

も炊けた後にふかすのがええのや」と教えられました。待ち時間にはお茶を飲み、きょうの仕事の予定を和上と私で話し、紙を切って準備するなどしていました。

書き終わると筆と硯を洗い、薄い墨汁ができます。道具を片付ける前に、包装紙を使って書の稽古です。お手本は、決まって「真草千字文」。書聖・王羲之おうぎし（三〇三―三六一年頃）の子孫で、隋の頃に活躍した智永ちえい（生没年不詳）が手掛けました。百歳を超えてまだ、手習いをするのですよ。最後は筆を洗って干します。弟子として近くで拝見していて、たいへんなもんやと思いました。とても私にはできないのですが、真似をしようと和上のされていたことを思い出してやっているのです。仕事も念仏ですが、和上にとっては念仏を唱えるだけではなく、字を書くことも念仏やったのですね。

かけがえのない 「いのち」

インドでできたお経『涅槃経』に大乘仏教の教えとして、「一切衆生 悉有仏性」とあります。「すべ

てに仏さんの性が宿ってんのや」ということです。これが「草木悉皆成仏」に変わり、天台宗の考え方で「草木国土悉皆成仏」になります。草木も、いわんや人間も「生きとし生けるものは、みんな仏さんになっている」との意味合いです。

以前、立命館大学でお話をした時、「もっと生活に密着して表現するなら、『仏さん』は何と呼べばいいのでしょうか」との質問がありました。「一切衆生 悉有仏性」で「すべてが仏さん」とするので、すべてが生きている。仏はいのち」であり、「仏教の根本はいのちの思想」と、私は理解しています。いのちほどかけがえがなく、いのちほど尊い、いのちほど普遍的な、こんな平等なものはありません。年寄りも若いも男も女も、区別がなく同じように時間が過ぎていくのですから。「いのちこそ仏」と言ってよいのではないか、と考えるのです。「いのちが仏さんで私が仏さんである」。この自覚だと思っておりますよ。

『平家物語』に登場し、平敦盛（一一六九―一一八四年）との一騎打ちで知られる武将・熊谷直実（一一四

一〇二〇八年）は、法然上人のお弟子さんでもありません。若い敦盛を討ったことを懺悔し、門徒となったのです。直実さんは、京都府長岡京市粟生に西山浄土宗総本山・光明寺も建てられたのです。直実には、「十念質入」という逸話があります。出家して法力房蓮生と名乗り、都から出身地の埼玉県熊谷郷に所用で戻る途中、追い剥ぎに身ぐるみはがされました。現在の静岡県藤枝市の辺りで、着物を調達するため借金しようとする、質草を求められました。蓮生が「南無阿弥陀仏」と十回唱えると阿弥陀さまが十体現れ、これを質草として借金ができました。熊谷郷で所用を済ませて都に戻る途中、借金を返して再び「南無阿弥陀仏」と唱え始めると、阿弥陀さまが次々に蓮生に吸い込まれていきます。地元では最後の一体を頂いて御本尊とし、寺が建てられた、との伝承があります。

「私が仏さま、行がまた仏さま」とすると、この考えの出所は「大慈大悲心」なのです。「慈しむ」という言葉の中に「惻隱そくいん」という意味もあります。

慈悲、思いやるということですね。「心の底から静

かに相手を思いやる」こと、ここから仏教の念仏の基本が出てくるのです。清水寺の近くの建仁寺に両足院という塔頭があります。臨濟宗妙心寺派管長を務めた山田無文老師（一九〇〇～一九八八年）が、しばしば花園大学の学生たちに語りかけていたのは、両足院で小僧経験のある釋宗演老師（一八五九～一九一九年）についての逸話です。

両足院で小僧だった釋老師は、お師匠さんが留守をした時、うっかり寝込んでしまいました。お師匠さんが帰宅した時、ばつが悪くてそのまま寝たふりをしていると、お師匠さんは釋老師に手を合わせて行ってしまった。これはいけない、自分は勉強のためここにいるのだと心を入れ替えて一生懸命勉強し、三十二歳の若さで円覚寺派管長になりました。山田老師は身近にいる学生に「もっとしっかりせよ」と激励していたのだと思います。おもんばかること。これは大慈大悲、仏心であるということです。一人一人が尊いのちを頂いている、これはすばらしいご縁です。

先祖代々と両親のいのちを頂いている私の中には、

ご先祖がいらっしゃるのです。かけがえのないものは、いのち以外にありません。しかし、一方で世界に目を向けると、現在も殺し合いを続けている地域があるのです。ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナもしくかりで、残虐な場面がお茶の間にTVを通じて流れているのです。繰り返しますが、仏教の根本精神は、いのちの思想なのです。

およそ百年前の日本は、ロシアとの日露戦争（一九〇四〜〇五年）をはじめ、何年かごとに戦争を繰り返していました。この時代に戦争に絶対反対を唱えたのが文豪トルストイ（一八二八〜一九一〇年）です。日露戦争が開戦した年、「ロンドンタイムス」に論文「戦争することなかれ」を発表したのです。

『トルストイの日露戦争論』（国書刊行会）には、この論文が収録されています。日露戦争について、トルストイは「誰にも無用で無益な困難が再来し、偽り、嘆きが横行し、人類の愚かさ、残忍さが露呈した」と指摘したうえで、「見るがいい。一方は一切の殺生を禁じる仏教徒であり、また一方は世界中の人々は兄弟であるとし、愛を大切にす

徒ではないのか」と非戦を訴えました。前者は日本人、後者はロシア人を示し、両国を批判しています。

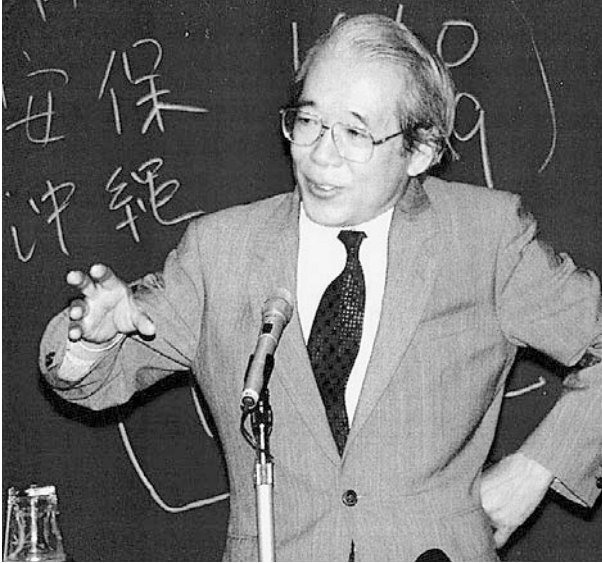
しかし、当時は「観念論を唱えれば戦争が収まり、平和が来るのか」と非戦論に疑問を持つ人たちもいました。これに対しトルストイは、最後の最後まで諦めきれず、「世界の人々は、もっと慈しみ合わねばならない」との主張を続けたのです。なるほど戦争は簡単になくならないと批判されるかもしれませんが、人間の行いはすべて心から発信されてくるのです。だから、心に平和を持たなければなりません。

第二次世界大戦後、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）憲章の前文は「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言しています。何もないのに、勝手に戦争が火を噴くわけではありません。人間の心が戦争をしてきたのです。観音さまや阿弥陀さまのすべてが念仏であれば、その基本は大慈大悲心です。「惻隱の思いやりの気持ち忘れずに、お念仏をしっかりと唱えなさい」と、法然上人が八百五十年前にお唱えになられ、それがご縁で清水寺・阿弥陀堂に

は、後柏原天皇（一四六四〜一五二六年）ご宸筆「日本最初常行念仏道場」の堅額が掲げられています。

高坂正堯さん再び注目

かつて京都大学には、すぐれた国際政治学者の高



世界平和への不断の努力が必要と説いた高坂正堯さん
(提供・静岡文化芸術大学)

坂正堯先生（一九三四〜一九九六年）がいらっしゃいました。亡くなって三十年近くになりますが、あらためて講演録が編まれるなど、高坂先生は再び注目を集めています。著書『国際政治 恐怖と希望』（中公新書）の結語で、高坂先生は、人間にとつての戦争を「おそらく不治の病であるかもしれない」と的確に洞察されています。一方で、「我々はそれを治療するために努力し続けなくてはならない」とも述べ、「我々は懐疑的にならざるを得ないが、絶望してはならない。それは医師と外交官と、そして人間の務めなのである」と結論付けています。不治の病ともいべき戦争ではあるけれども、私達は最後まで平和を唱えなければならぬ、と主張されているのです。

まさにその通りで、八百年前の法然上人は、称名念仏で「私たちの世界はすべてが念仏である。行住坐臥、いのちそのものが念仏や」と、主張されたのではないのでしょうか。現在の世界各地での戦争のニュースを見ても、法然上人のお言葉が今なお生きるといってつくづく感じる次第です。